

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

異邦人のスカイリム

【作者名】

蛮族

【あらすじ】

東京で派遣会社に勤める「俺」は休日買い物に行こうと玄関を出たはずだった。

しかし、気がつくとも知らぬ山道の中。

呆然としていた彼は中世風の武装した集団に襲われ、不審者として捕縛されてしまうのだった。

彼が落ちた土地の名は「スカイリム」。

タムリエル大陸の北部に位置する寒冷な気候の土地であり、彼にとってはゲームの中の世界であった。

帝国の一領土であるこの地は、近年起きた帝国とアルドメリ自治領との戦争と、その結果疲弊した帝国が休戦条約として結んだ白金協定によって騒乱の最中にあった。

近年起きた大災害により増える難民、条約の中に定められたタロス信仰の禁止令がしかれたことなどで帝国に不満が増えるなか、各酋長の意向を無視してタロス崇拜の禁止に上級王が勝手に合意してし

まったことで不満が爆発。この上級王を声（シャウト）の力で抹殺したウルフリック・ストームクローク率いる反乱軍『ストームクローク』による内戦が引き起こされているのだ。

しかも、ゲームのままに物語が進行するのであればこの土地にはドラゴンボーンと呼ばれるものにはしか倒すことのできない不死のドラゴン達や、太陽を永遠に消し去り、人々を支配せんとする吸血鬼の王、拳句の果てにはドラゴンすら恐れる初代ドラゴンボーンが野望のもとに蘇えってしまう。

はたして彼の、そしてスカイリムの運命やいかに。

言うまでもなく、スカイリムというゲームの二次創作です。

異邦人の驚愕

これが夢ならどんなに良かっただろうか。
俺は囚人となっていた。

「おいあんた、ひどく痛めつけられてたな。大丈夫か？」

「何なんだいったい、俺が何をしたっていうんだ。」

俺は痛む体で周りを見渡しながら喚いた。

大丈夫なわけが無い。

平和な日本で暴力というものにまず縁が無い平凡な生活をしている俺にとって、金属製の鎧を着た人間に殴る蹴るの暴行を加えられるなんて言う経験は当然初めてだった。

みっともなくうずくまって助けを請い、やまぬ暴力に意識を飛ばし、気がついたら手枷を嵌められて馬車の上だ。

正直、大きいほうを漏らしていない事におどろきだ。

「イスミールにかけて、ここらじゃみた事が無い服だ。お前さん、いったいどこから来たんだ？」

「日本だよ、何なんだあんたらは。まさか北朝鮮の拉致部隊か何かなのか？こんなに雪があるって事は東京じゃないのか？」は。」

「ニホン？トーキョー？」

時代錯誤な木製の馬車に揺られるほかの人間が俺の言葉に驚いたような顔をする。

目の前に座っている白人の兄ちゃんは最初の同情のまなざしから

まるで、がいを見るような顔になっている。やめる、俺をそんな目で見るな。

「大体なんだよ、『イスミールにかけて』とか、どこのスカイリムだよ。コスプレごっこにしたって他人を巻き込んだ拳句殴る蹴るってのは犯罪だろ。」

そこまで言うつと、俺はだんだんと腹がたつてきてそ知らぬ顔で馬を操る御者席の兵士っぽいコスプレ野郎に罵声を浴びせた。

「おいにーちゃん、いい加減この枷をはずしてくれよ。俺は関係者じゃないんだ！」

だが、返ってきたのは「黙れ、また殴りたいのか」の一言だけだった。

俺は意味不明な状況に頭を抱えて蹲ろうとして、枷のせいでそれもできずため息を吐いて顔を覆った。せめてもの救いは、あの暴行を受けてなお眼鏡が壊れていなかったことか。

「ちつきから何を言っているのかいまいちわからんが、ここはスカイリムだぞ？」

気を取り直したのか、人のよさそうな目の前の白人がまた声をかけてくる。言っている内容が電波でなければ仲良くしてもいいのだが。

「スカイリムって、あんたゲームのやりすぎなんじゃないのか？確かにあれは面白いゲームだけど、こんな衣装用意してコスプレして遊ぶほどのめり込むなよ。」

そういつて、俺はため息を吐きながら空を見上げた。

シャーン

すると、音叉を鳴らしたような音と共に妙なものが目の前に広がった。

星座だ。

正確にはゲームをしているときに何度も見たスカイリムのスキル画面である。

それが空をスクリーン画面にしたかのようにでかでかと広がっていた。

そのときの俺の顔は、さぞや見ものであっただろう。

なんだよこれ、と言おうとして、自分の体の感覚が無くなっている事に気づいた。体の痛みも、突き刺すような寒さも、しているはずの眼鏡の感触すらない。

何より突っ込むべきところは、初期は15あるはずのスキルがまったく成長していないことが。

右と意識すると右に、左にと意識すると左にスライドする星座をざっと確かめてみるが、どうやらスキルは実際にやったことがある物以外成長していないようだ。

魔法関係は軒並み0、鍛冶などの生産系も当然のように0、戦闘も剣道をかじっていたおかげか両手武器と軽装が10ほどだったが、正直何の慰めにもならない。

違いといえば、表示されている名前が自分のものになっていて、Lvが1、種族がジャパニーズとなっていることか。なにやら機械とか、料理とかいう妙な星座も増えていたが、スキルポイントもないので詳細は見なかった。

これは、もしかしなくともそういつことなのだろうか。

俺はスカイリムの世界に迷い込んでしまったようだ。

B・O・S

しばらく輝く星座を見ながらこれからどうするかを考えていた俺だったが、正直どうしようもないという結論に至った。

この世界がスカイリムで、今捕虜として青い鎧の兵士、所謂一つのストームクロークの団体が護送されているということは、これから向かうのはヘルゲンで、馬車に座る位置からして俺がプレイヤーという扱いなのだろう。ゲームでいうといまはチュートリアルの真つ最中ということだ。そうじゃなきゃ帝国兵はストームクロークを捕虜に何ぞしないで、その場で殺して終了だろうし。

問題なのは、ここはゲームとは違い、痛みはあるし死にもするという極めて現実に近い世界だということだ。まあ、そもそも現実じゃ上を眺めたから星座画面が出ました、なんてことはありえないのだが。

もし、もし仮に俺TUEEEE系のトリップだというのなら、メニューが開ければ魔法の有効な効果のところの凄い強化がかかっていたりありえないアイテムを所持していたりするのだろうか……武装していたとはいえ兵士に素手でボコボコにされた以上望みは薄い。

処刑が始まり、自分の番が来るまでに竜の襲撃があることを祈るのみか。

結論を出した俺は視点を下に戻した。

「だめだ、こいつ完全にいかれてやがる。昔のスカイリムは良かった。お前らストームクロークやB・O・Sが現れて以来何もかもがめちゃくちゃだ。」

後ろのほうに座っていた馬泥棒、ロキールがストームクロークを罵りだしたが、何やら俺の耳はおかしくなったようだ。ありえない単語が聞こえる。

「われわれはスカイリムの為に戦っている。あんな得体の知れない奴らと一緒にするな。」

目の前の金髪の白人、おそらくはレイロフが気分を害したように悪態をつく。

「さてよ、B・O・Sってどういうことだ？銃で武装したハイテク装備の奴らがこのスカイリムにいるっていうのか？」

俺が会話に入ってくると思わなかったのか、それともB・O・Sを知っているのが意外だったのか、彼らは顔を見合わせた後俺に質問を投げかけてきた。

「まるでB・O・Sに詳しいような口ぶりだな。奴らはある日突然現れて、奇妙な武器で巨人や山賊どもを追い払いバルグルーフ酋長に取り入り、今じゃホワイトランの一大勢力だ。それ以上は誰も詳しいことを知らない。胡散臭い連中だよ。」

中世風ファンタジーの世界を闊歩するハイテク装備のパワーアーミー軍団。まさに絵に描いたような俺TUEEEE軍団である。

銃弾やレーザーで蜂の巣にされる巨人と山賊というのは実にシユールな絵面であっただろう、ぜひ見てみたい物だ。

「B・O・S、正確にはBROTHERHOOD OF STEEL。俺が知っているのはキャタピルウェストランドにいる超技術の発掘を主な目的としている危険な武装集団だ。少なくとも剣や弓で敵うような奴らじゃない。魔法だって効果があるかどうか……」

彼らの着る鎧は対銃撃戦を想定しているような科学技術の結晶である。物にもよるが、ゲームの中でキツネを一匹仕留めるのに何発も打ち込むのが前提のような初級呪文では傷をつけるのにも一苦勞の筈だ。

存在すら知らなかったであろう彼らが魔法を使えないのが唯一の救いともいえるが、習得できていないだけで今では普通に使える可能性もある。付呪の達人がレーザーガトリングあたりに2つの付呪をつけたら、もはや誰に求められないだろう。

それよりも最悪なのは、スカイリムの世界にFairmountの住人が紛れ込んでいるとなると、ドラゴンプリーストベヒーモスとか、意味のわからない超生物が誕生している可能性もあることだ。拳一つで建物を吹き飛ばし自由に空を飛び自在に魔法を打ってくるビルのようにでかい化け物とか、国が滅ぶんじゃないだろうか。

俺は最悪の場合を想像してげっそりとした。

まあ、そんなもの作ったら自分がやばいのはドラゴンもわかるだろうし、そもそもスーパーコンピュータまで来ているかどうかは未知数である。これは心配のし過ぎか。

そんなことを考えながら、俺は彼らにB・O・Sがどんな存在なのか、彼らさえ生活していくのが困難なキャタピルウェストランドがどれほど危険な場所かをとつとつと説明した。

「なるほどな、そんな場所から来たんじゃないや農場の警護に気合が入るわけだ。えらく食い意地が張った連中だとは思ってたが。」

「奴らは賄賂も受け取らないし、ちょっとリンゴをくすねただけでも警告なしで攻撃してきやがる。リフテンじゃ奴らの懐を狙ったアホ

のせいで盗賊ギルドが襲撃されて、生き残りは一人もいないって話だ。」

「盗賊ギルドえ……」

B・O・Sはバリバリの武闘派が多い連中である。コップ一杯の水で殺し合いが起きるようなすさんだ土地で生きてきた彼らに冗談は通用しない。ノクターナルには涙を呑んであきらめてもらおう。

「ところで、このえらく嚴重に拘束されたおっさんは何なんだ？ 口まで縛られるとかいみがわからんぜ。」

話し込んだせいでヘルゲンについてしまいそうだ。

俺は本来のチュートリアルの流れに戻す為、隣でじっと座っているノルド、つまり自称上級王ウルフリック・ストームクロークをさせてあげをしゃくった。

思うに、この男を竜の襲撃の前に処刑させることができれば内戦クエストは発生させることなく穏便に済ませられそうな気がする。

「言動には気をつける、お前は今上級王ウルフリック・ストームクロークと話しているのだ。」

「ウルフリック？ ってことはこのおっさんが反乱軍の指導者なのか？」

おれはさも今気づきました、といった態度でウルフリックをじろじろと見回した。

「上級王っていったって、ようはテロリストだろ。強い奴が正しいって言うのならスカイリムは遙か過去にドラゴンの支配を受け入れるべきだったんだ。」

「貴様、我々を侮辱するのか！」

レイロフが顔を怒りで紅潮させながら俺を睨み付けてくるが、ゲームの中でストームクロークのノルド至上主義を見ていた俺は覚めた眼でそれを見ながら反論した。

「酋長は民の支持の上に成り立つ、それはお前らが生まれる以前にノルド自身が決めたことなんだろうが。帝国の支配下に入るか否か、それにしたってそうだ。それらの現実を無視して自分達の都合が悪くなったら暴力でそれを覆すって言うのはそこらの山賊と変わらないだろうよ。」

「不当な弾圧に屈しろというのか、我々の信仰を否定されたのだぞ！」

「戦争に負けるって言うのはそごいことだろ。」

神や魔法が実在する世界の住人であるレイロフにとって、タロス崇拜の弾圧は恐らくは重要な問題なのだろう。無神論者だった俺も今のような状況に置かれてなお、それらを否定する気にはなれない。

だが、

「信仰は心の問題だ、偶像がなくとも祈り願うことはできる。少なくとも皇帝はサルモールから民を守るために白金協定を結んだんだ。相手の要求を呑まなければならぬほど、帝国はぼろ負けしたっていう証拠だ。」

「そご、黙れ！」

御者の兵士がイラついた声で話を遮るが、俺は肩をすくめて話を続

けた。

「内戦でどちらが勝っても帝国の国力は衰退する。さて、一番得をするのはいったいどこの誰なんだろうな？ かつての帝国でもサルモールには勝てなかった。内戦で疲弊した帝国が再び攻め込まれた時、果たして今度は耐え切れるかな？」

そこで俺は一度言葉を区切って、レイロフが俺の言葉に考え込んでいるのを確認してからさらに話を続けた。

「信仰するものを大切にするな、とは言わないよ。だが信仰を理由に殺人を行うのはただの犯罪者だ。その行為はお前さんがたの嫌うサルモールと何が違うんだ。」

「さて、難しい話とはかく、そこにいるのが反乱軍の首謀者だつて言うのなら俺達はどこに連れて行かれるんだ。」

いまごろ自分の置かれている境遇の危うさに気付いたのか、馬泥棒が顔を青くして話に入ってきた。

「まあ、向かう先は断頭台だな。さっきも言ったが内戦を長引かせていいことは一つもないわけだし。」

「お前は馬鹿か！これから死ぬって言うのになんでそんな落ち着いているんだ！」

俺の余裕が気に食わないのか、馬泥棒は俺に罵声を飛ばしてくる。まあ、余裕なのは自分の処刑がドラゴンの襲撃で未遂に終わるのを確信しているからなのだが。

「どうかな？ 案外奇跡が起きて助かるかも知れんぞ。空から星が降っ

てくるとかな。」

「……お前さんは、頭がいいのか馬鹿なのかいまいちわからんな。みる、どうやら着いたみたいだぞ。」

レイロフが呆れたようにそうついと、皆が前のほうを向いた。

「おいおい、衛兵はどっした。」

思わず、口から突込みがこぼれてしまう。

要塞を囲む城壁の上でガトリングを持ったアウトキャストパワーアーマーがうるうるしているように見える。まさかB・O・Sとは彼らのことなのだろうか。

しかも恐ろしいことに、やつら俺を見て何やら連絡を取り合っている。まあ、スカイリムの住人とはあからさまに様式が異なる現代の服を着ていれば興味を引いてもおかしくはないのかもしれないが。

「これはティリウス将軍、死刑執行人が待機しております。」

「よし、やつらと終わらせよう。」

何やら門を通り過ぎるとき、不穏な会話が耳に入ってくる。どうやら予定調和のごとく、彼も立った今要塞に到着したようだ。

その後はまさにチュートリアルの流れのままだった。

帝国軍とサルモールに悪態をつくレイロフ、神に助けを求めるロキール、さっさと殺せばいいものをウルフリックにわざわざ勝利宣言をするティリウス将軍。

流れが変わったのはその後だった。

「刑の執行は待ってもらおうか。彼は我々の仲間だ、ストームクロークではない。」

「何だ、貴様らは？」

レーザライフルやガトリングを手に持った武装集団が、刑を執行しようとする帝国軍に乱入してきたのだ。

よく見るとモハビ風の装備のガンマンやV a u l t 1 0 1 アーマードジャンプスーツに身を包むものもいる。7〜8人しかいないが、正直剣と弓が主兵装の帝国軍ではあつという間に蜂の巣だろう。

「隊長、どうします。確かにこいつはリストには在りません。」

「リストは関係ない。死んでもらうだけよ。」

処刑リストを確かめていた体格のいい兵士（おそらくはハドバル）があたりに漂う不穏な空気に気付いたのか武装集団から距離をとりながら確認を取るが、隊長と呼ばれた傲慢なレッドガードの女が無謀な宣言をする。

神に誓ってもいいが、この女は銃の恐ろしさを欠片も理解していないのではなからうか。

「雑魚の癖にむかつく女だ。もういい、やっちまおうよ。そのほうが話は早い。」

カウボーイリピータを持った女が、隊長の台詞に武器を構え、他のメンバーも武器を構えて円陣を組んだ。帝国兵もそれに反応して弓や剣を抜き放ち、たちまちヘルゲンに不穏な雰囲気が漂う。

「やめろ、戦闘は最後の手段だと会議で決まっただろ。無駄に人を死なせることはない。」

そういつてパワーアーマーを着た男がカウボーイファッションの女をたしなめるが、その台詞では帝国兵が雑魚と認めるようなものだ。偉ぶっていたレッドガードも剣を抜き放っている。

「我々B・O・Sはこれまで十二分に帝国へ協力してきた筈だ。

今回の捕り物にしたって、作戦中手薄になる砦の防衛を我々が行っていた。その礼が仲間の処刑だというのはなら、我々も帝国に対し存分に礼を尽くさねばならん。」

「かまわん、その男を開放してやれ。」

「ティリウス將軍！」

緊迫した広場に帝国式の鎧を着たインペリアルがやってきた。ゲームでは内戦クエストで重要な役割を果たすNPC、ティリウス將軍である。

「彼らB・O・Sが大いに帝国軍に貢献しているのは私も知るところだ。確たる証拠もないのにそんな彼らの仲間を処刑したとあっては帝国の威信に傷がつく。」

「おお、さすが將軍、話がわかるな。では、こいつは連れて行かせてもらうぞ。」

乱入してきたときに先頭に立っていたパワーアーマーの男が俺のほうに歩み寄り、両手の拘束を開放する。

「あんたら、どういっつもりだ」

俺は周囲に聞こえないように小声で彼に質問する。

どう考えても、俺と彼らに面識はない。怪しさをここにきわまれり、といったところである。

まあ、処刑されるよりはましなのは確かだが。

「後で説明する。アルドウインの襲撃が起こる前に地下を通ってここを離れるぞー」

パワーアーマーの男はそういつて俺の肩を叩くと、

「我々は荷物をまとめたらホワイトランに戻らせてもらう。また何か作戦行動があれば連絡員に伝えてくれ」

とティリウス將軍に言い放ちずんと歩いていく。他のメンバーも異議はないらしく彼に続いて城門のほうへ去っていった。

「奇跡が起きたようだ。じゃあな、レイロフさんよー」

そういつと、俺はあわてて彼らに続いた。

後ろのほうでレイロフがなぜ自分の名前を知っているんだ、などと言っていたが時間的にアルドウインの襲撃は間近だ。奴の叫び声が山に木霊するのが聞こえる。

「走れー奴が来るぞー!!」

もはや襲撃について知っていることを隠す必要もないと感じたのか、B・O・Sのカウボーイが門の前で俺を呼んでいる。まあ、ゲームの流れで言えば主要NPC以外は全滅するという話だから、隠す必要もないのかもしれぬが。

このときの俺は、まだここがスカイリムのゲームの流れのままに動いている世界だと思い込んでいた。B・O・Sの連中がいることまで、

もはやゲームどおりの進行などありえないという事に気付いていながら、気付いていなかったのだ。

そしてそのツケを、ここヘルゲンからの脱出の際に支払うことになるのだった。

脱出

俺はB・O・Sと共に、チュートリアルでも通る砦地下を通過する脱出路を進むのだと思っていたが、彼らに続いて砦の扉をくぐった俺に、彼らのリーダーらしきパワーアーマーの男、自称RDがアーマーとヘルメットを渡してきた。

見た感じFairlout3で出てくる傭兵会社タロンの物である。実物として目の前にあると、妙に感慨深い。

「くれるのか？スカイリムじゃ手にはいらんだろうに。」

正直、処刑から救出されただけでも大分助けてもらっている。

將軍とのやり取りからして、彼らはすでに組織としてそれなりのリスクを支払ってあの信頼関係を構築しているのは間違いない。それに亀裂が入る可能性を考慮した上で見ず知らずの俺を救出してくれたのだ。

何から何まで世話になるといっなのは、正直気が引けた。

だが、RDは遠慮している俺を気遣ったのか、強引にそれを押し付けてくる。

「遠慮はするな、そんな普通の服じゃ矢の一つも防げんだろう。まあ、正直それを着ても気休め程度にしかならんだろうが……とりあえず気休めにはなる。」

コンバットアーマーで気休めにしかならない、というRDの言葉が少し気になったが、確かに買い物に行くために着ただけの普段着では防御力は無きに等しいのは帝国軍の手によって実証済みだ。スカイリムは、熊や狼など日本ではまずお目にかかれない危険な野生動物が跳梁跋扈する危険な土地であるし、彼の言うことはもっともだ。

「何から何まですまない、ありがたく使わせてもらっしょ。」

そういつて受け取ったものの、ゲームで一瞬で着替えられる装備は実際に着込むとなると勝手がわからず途方にくれる代物だった。もたもたしていると砦が隕石で崩れ始めてしまっただろっ。

「違っ違っ、実際に着るんじゃないやなくゲームでボタンを押す感じでじっ
と見つめてみなよ。そうすりゃ、多分やり方は何となくわかるっ
しよ。」

どさくさにまぎれて砦の兵士の私物が納められているであろう箱
などの収納を開けて漁っていたいたカウボーイファッションの女が、
俺に人差し指を振ってみせる。

そういえば、先ほどは全員が各々の銃器を装備していた筈なのに、
通路を先に歩いていった面子以外は気付くと皆無手になっている。
これは、つまりそういつことなのだろうっか。

「見つめるっ。」

受け取ったアーマーを見つめながら、取る、と念じるとその瞬間、
アーマーとヘルメットはガサリという音と共に虚空に消えてしまっ
た。

「おおっ。」

手は、いつの間にか空気をつかんでいる。

少々混乱したが、星座の件で何となくどういいう状況かは予想でき
た。恐らくは視線という名のカソールをあわせ意識のスイッチを押
すことで、アイテムを取得したのだ。

「俺の場合、意識して腕のPIIP BOY3000を覗き込むとゲー

ムで言うステータスチェックや道具の操作を行う画面の状態になる。眼を瞑ったり、口を片手で押さえたり、キーボードやコントローラーを操作する仕草をする奴がいたり様々だ。用は意識を集中させればいいんだよ。」

と、俺に言い聞かせるようにRDが解説する。

「わかったよ。助かるよRDと、あー……そういえば自己紹介もしていなかったな。」

礼を言おうとして、RD以外の名前を知らないことに気がつく。名前を名乗ろうとする俺を手で制して、カウボーイハットの女が先に名乗った。

「ロザリイで通してる。姐さんでもいいぞ。」

「それはギャグで言っているのか?」

俺は思わず言った。彼女とRDの名前の由来が某ロボゲーにでてくるキャラのネタだとすると、そのネーミングはあまりにも不謹慎だ。

「その単細胞の不謹慎は今に始まったことじゃないさ。」

だが、俺達異邦人は昔の名前を名乗らないのが不文律でね。君もなにか考えておくといい。」

RDがロザリイを見て苦笑しながら言った。(とはいえ、そんな気配がただだけでヘルメットに包まれた顔のほうは見えない)

スカイリムをS NYのゲーム機でやっていた俺は、コントローラーでメニューを開くつもりで、操作のまねを試みる。

瞬間、目の前にゲームでおなじみのウィンドウが出現し、それ以外の視界が急激にぼやける。感覚としては星座を見上げたときとほぼ変わらないため、今回はあっさりを受け入れることができた。

不満があるとすれば、比較的新しかった普段着が『擦り切れた服』と表示されたことだが。

おそらく暴行を受けた際、鎧の金具に引っかかるなどしてほつれた箇所があったからであろう。捨てることも考えたが所持重量はまだ余裕があったので所持したままにしておくことにした。

RDからもらった防具は、概観から予想ができていたとおりの『タロンコンバットアーマー』と『コンバットヘルム』である。防御力は28と5という風に表示されていたが、正直あまりあてにはならなそうだ。数値としては革製の防具にも劣ることになるが、仮にも銃撃戦に使う防具が、その程度とは思えない。

「しっかし、予想通り碌なものがおいてないな。帝国が疲弊しているのは理解してはいるが、奴らこんな間に合わせの装備でストームクロークを鎮圧できると思っているのか？」

ロザリイがどこからとも無くだした帝国軍装備を床に捨てながら肩をすくめた。

好き勝手にアイテムを漁った拳句、間に合わせとってゴミのように剣などを床に投げ捨てるのはどうかと思うが、俺もゲームで語られている帝国軍には思うところがあった。

彼ら帝国軍の兵士に支給されている装備はどれも強化もされていない武具であるし、まだまともな軽装鎧と違い、重装、つまりフルプレートなどの重い装備扱いのものは、作成コストばかりが高く、同時に性能も大してよくないため二束三文で取引されるゴミである。

確かにストームクロークも良い装備をがちがちに着込んでいるわ

けではないが、スカイリムの住人である地の利は彼らに在り、少数しか兵を派遣できないとなればせめて武具くらいまともなのを支給してしかるべきだろう。

「2000年前の動乱からいって、帝国はあるいみ順調に国力を落としていっているからな。帝国兵に聞いた噂じゃオブリビオンの門で騒がしかった当事にも俺達のような異邦人はいたって話だが、この様子だとB・O・Sを引き止めるために流したホラかね。」

RDが投げ捨てられたよろいを見ながら失望したように呟いた。

聞き捨てならない内容に聞き返そうとしたその時、腹の底に響くような爆音が砦内部にいた俺達を襲った。

「アルドウィン襲来か、急いで撤収するぞ。」

そう言ってB・O・Sの面々が走り出すのにあわせて、俺も後を追うように砦の中を走り出す。まだ自己紹介をしていない面子がいたのだが、このままここにいれば脱走したストームクロークと帝国兵の争いに巻き込まれてしまう。

何やら道中、爆音に異常を察知し、対処するため地上に出ようとする兵士とすれ違ったり、なぜか殴り倒されたりしい拷問官の姿を見かけたりしたが、一応友軍であるためか邪魔はされなかった。

初めて見るのに既視感を感じさせる砦内部を直走りながら、俺はアルドウィンについて思いを巡らせた。

俺はメインクエストを終わらせていないので、攻略情報の上でしかその存在を知らない。

知っているのは、ゲームのメインクエストのラスボスであり、声（シャウト）の力で火を吐くわ、霧を生み出すわ、隕石を呼び寄せるわ……倒したドラゴンの魂を吸収できるはずの主人公に倒されたにも

かかわらずその魂は天に昇っていくわと、いろいろ規格外の竜だといふことだけだ。

結局、なぜ彼がゲームの序盤でヘルゲンを襲って主人公を処刑から救ったのかは作中で明らかになっではない。ノルドの英霊達が死後送られるという冥界、ソブンガルデの魂を喰らう事でその力を高めるといふ設定がある為、戦争の終結を避けるためにウルフリックの処刑を邪魔したとも、ドラゴンの気配を感知できるためにドラゴンポーンである主人公に同胞の気配を感じて様子を見にきたとも、たまたま復活した場所がヘルゲンに近かった為だとも、如何様にも取れる。

「まあ、ここまでくれば安心だろうな」

先を走っていたRDが、地下牢として使われている区域を抜けたあたりで脚を止めた。

ゲームでは壁が崩れ、自然洞窟とつながっている部屋だ。そこかしこに拷問された捕虜の成れの果てとも言える白骨死体がおかれており、黴臭い空気とあまってあまり長居したい場所ではない。

プラスチック製のおもちゃとは違う、汚れたような色合いの茶色い骨がなんとも不気味で

、顔が青ざめる。

「ミュータントの遭遇戦も考えられる、各員戦闘準備。」

『ラジャー！』

RDの指示に従い、B・O・Sの面々が次々に銃器を取り出し武装した。

「ミュータント？」

スカイリムにはそんな敵は存在していないはずだ。俺は首をかし

げた。

「ベセスダのゲーム知識はあるんだろう？ Fallout3のキャラクターは、全員あるウイルスに感染している。それは知っている筈だ。」

ハンティングショットガンに散弾を詰めながら、俺を横目に口ゼリイがさらりと恐ろしい事を言った。

「おいおい、まさかスカイリムの野生動物が突然変異を起こしているって言うのか!？」

FEV（変異促進ウイルス）。

核戦争後の未来世界を舞台にしたゲームであるFallout3において重要な要素であるこのウイルスは生物を強制的に進化させるといった特性を持っている。元々は戦争中製薬会社の研究により生み出されたまったく別目的の物であったが、生物実験により発見された強制進化という特異性が軍の目に留まり、スーパーソルジャー計画の為に研究を進められたものだ。

ゲーム内で出てくるスーパーミュータントと呼ばれる、黄緑色の肌の化け物はこのウイルスによって強制進化させられた人間の成れの果てであり、主食が人間の肉という恐ろしい習性を持つ人間の敵である。他にも、巨大化したゴキブリ『ラッドローチ』や銃弾すら弾く甲殻をもつ蠍『ラッドスコルピオン』、二足歩行し異常発達した筋力と爪で獲物を引き裂くトカゲ『デスクロー』などなど、突然変異した動物は人類を苦しめる猛獣ばかりだ。

「恐らく、熊などに食われた他の異邦人グループの中にわれわれと同じFallout系の住人がいたのだろうと思われる。今のところ目撃されているのはヤオ・グアイやモールラット位だからな。」

すでに状況を受け入れているらしいRDとは違い、俺は頭を抱えた。

「モールラットはともかく、ヤオグアイはやばいんじゃないのか？」

モグラとネズミを掛け合わせたような気色悪い外見のモールラットは、外見の凶悪さは兎も角、野生の狼が跳梁跋扈するスカイリムでは大した脅威にはならないだろう。

だが、熊のミュータントであるヤオグアイはまずい。

ヤツは巨体に見合わぬ俊敏さと、強固な防具をも紙のように引き裂く凶悪な筋力を持つ。加えて至近距離からのショットガンにも耐えるタフネスは、とても剣や斧、弓矢でどうにかできるものではない。

「まあ、最初の頃はひどいもんだったよ。知識の無い衛兵や農民が何人も犠牲になったが、俺達がホワイトランに受け入れられたのはそれらのミュータントに対抗できる勢力が必要であったからだということも大きい。」

「なんと一つマッチポンプ。」

FEVの事が知られたら寧ろ追われてもおかしくない。

命の恩人とはいえ、俺はとんでもない奴らと手を組んでしまったのではなからうか。

「まあ、今のところミュータントの目撃情報が多いのはリフテン周辺だけだ。感染を抑えるには排泄物などを処理する必要があるんだろうが、なぜか俺達の体は新陳代謝がとまっている。戦闘による出血などに気をつければ感染の拡大は防げるだろうよ。」

正直、自分でも汗もかかないのは生物としてどうかと思うが。」

「お話中悪いが、そろそろ行かないか。無いとは思うが、レイロフやハドバルに追いつかれてもまずい。」

Vaultアーモードジャンプスーツに身を包んだ男が、RDの話
を遮る。

彼は先ほどから、しきりに後方を警戒していた。部屋の入り口に地雷まで仕掛けているが、いったいどういふつもりなのだろうか。

チュートリアルでは帝国兵であるハドバルと共に脱出する道でもある通路にそんなものを仕掛けては、彼を死なせることになりかねない。

「俺達B・O・Sの当面の目的は内戦の終結だ。」

帝国にテコ入れて戦力を補強しつつ、早期にアルドウィンを撃破する。ドラゴンボンであるはずのキミを救出に来たのはその作戦の一環だ。」

俺の視線から、疑念を感じ取ったらしいRDがいきなり語りだした。

「ハドバルにはうちの作業員が付いている、地雷程度なら問題なく対処するはずだ。逆にストームクロークの連中が脱出してきた場合は、対処もできず吹き飛ばさるだろうな。ウルフリックがそうなれば言うことなしだ。」

「そこまでする必要があるのか?というか、どさくさにまぎれてウルフリックを処刑場で射殺すればよかっただろうに。」

どつにも、やっていることがちぐはぐである。

「アルドウィンの目的がわからない以上、ヤツが現れるまでは本来の歴史どおりに進めるべきという意見が強くてな。一応ヘルゲンは生

命探知に引つかからないアイポッドでの監視をしているから、ウルフリックは脱出成功できたとしても潜んでいる別働隊に始末される予定だ。」

「アイポッドまでいるのか。コンパニオンつきで出現したということか？ますます訳がわからんな。」

ファンタジー世界を浮遊するレーザー武装した監視装置というのは、またシュールな話だ。銃器もある以上いまさらな話ではあるが。

「この先、出口付近の蜘蛛を倒した後はヤツが飛び去るのを待ってリバーウッドに隣接して作ったベースキャンプで一晩休息を取る。その後はお前さんが声（シャウト）を習得できるかどうか確認するためにブリークフォール墓地まで同行してもらおうぞ。」

「強行軍だが、まあ、ゲームと違ってチート装備の仲間がいるんだし気楽にいこうぜ。」

当然、同行するんだろう？という態度のRDと、罪悪感のかけらも無い軽い態度のロザリィ。ここで断わるうにも、ミュータントまでいるのではどの道武器も無い俺に取れる選択肢は無いのだ。

俺はため息をついて両手を広げ、大げさに肩をすくめて見せた。

「はいはい、仰せのままに。どうにも俺に選択肢は無いようだしな。」

「まあ、事が終わればバニシユの付呪された棒で小突いて送還できないか試してやるさ。肉体からして違う俺達と違って、あんたにはまだ可能性があるわけだしな。」

嘆く俺の方を叩きながら、地雷を仕掛け終えたヴァルティーマー ドジャンプスーツの男が俺を励ました。確かに、何者かが俺をこの世

界に召喚したのであれば、召喚された者を送り返す効果のある付呪、『バーシユ』で日本に帰ることができるともかもしれない。

「思いつかなかったよ、そのときは頼む。あー……」

「ゴルゴだ、ゴルゴ101。狙撃や破壊工作が担当さ。」

そっついながら、彼は浅黒い肌の顔でニヒルに笑った。

かくして、一応俺は日本に帰るめどが立ったのだった。もっとも、その為に化け物や山賊がはびこる土地で冒険し、伝説のドラゴンを退治するというなんともファンタジーなクエストに付き合うことが決定したわけだが。

どうにも、一筋縄で行かないような気がしてならないのは俺の気のせいだろうか。

閑話 ルーカン・バレリウスと酒場にて

あいつらについて知りたいって？ 我らがB・O・Sについて？

あいつらが現れたのは、ここ十年ほど前の話だよ。それこそファエ
ンダルの野郎がこの村に住み着いたりする前の話だ。スヴェンの奴
も当時は笛なんぞ吹かずにまだ元気だった親父さんと樵に精を出し
ていたな。

俺？ まあ、おれは今と同じさ。お前らみたいな旅人と相手に色々
売って商売して、妹はそれを手伝っている。ずっとそうさ。

戦争がなければな。リバーウッドだって戦前は活気があったんだ。
ヘルゲンとホライトランを結ぶ要所だからな、帝国から来る奴らは
みんなここを通る。そういう奴らの為に作られたのがこの集落の由
来だよ。

ああ、B・O・Sの話だったな。すまんすまん。

あいつらB・O・Sは、見たこともない素材で作られた未知の道具
の使い手で、少し街を離れば夜盗と化した傭兵が跋扈するスカイリ
ムじゃ珍しい、いや、いっそ異常と呼べるほどに人が善い旅人だった。

それが歓迎すべき事柄であるのはいつまでもないな。

実際あいつら値切るって事を知らないからこっちの言い値で物を
買っていくんだ。スヴェンの阿呆がB・O・Sの女にべた惚れして
あれこれ世話を焼かなきゃ、今もあいつらは上客のままだったろう
よ。

まあ、ある意味では値切り方を覚えてくれてよかったよ。リフテン

の盗賊ギルドがあいつらの手で壊滅したって話を聞いたときは、あいつら相手にぼったくっていたなんて怖いもの知らずだったって思い知らされたよ。

それに、あの間抜けはこっぴどく振られたようだかしな。RDとかいったか、あのねーちゃんが惚れてるっていうB・O・Sの隊長さんは。

まあ、何にせよ街道があり人の往来があるとはいえども、それを守る余裕がお世辞にも十二分にあるとはいえない当時のスカイリムじゃ、商売は各皆で完結しているのが当然だったのだ。

外部との取引は怖いもの知らずのカジートキャラバンに頼るか、帝国の補給部隊にくっついてくる行商に頼むしかなかった。どっちもいつくるのかわからないって意味じゃ博打に近いものがあつたから、そう大きな取引はできなかつたよ。

言うまでもなくカジートは悪名高きスクウーマーも取り扱っているしな。ここはともかく、カジートの来訪を歓迎するほど酋長連中は寛大じゃない。

可哀相に、カジートの連中は皆に入ることすら許されずその外でキャンプを張って取引を行わなければならず、不安定な品揃えゆえに当然購買層は限られていたってわけだ。

だが、それもかつての話だ。

不可思議な収納術をもつあいつらは馬車も使わずに大量の物資の運搬を可能とし、そしてその身軽さからくるフィットワークのよさは流通量の増加をもたらした。

おれも当時色々世話になっていた一人だよ。

不思議なことにあいつら昔は自分で商売をしなかったからな。色々手に入れてきては俺に売っていくから、品揃えは抜群に良くなっ

た。そしてそれを別なB・O・Sの奴が買っていくんだ、何かややこしい決まりがあるとかでB・O・Sの身内で売り買いはできなかったんだとよ。

あんまりにB・O・Sの連中が便利なもんで、補給に手を貸して以来皆に必ず一人はあの妙な鎧の奴が常駐しているとかなんとか。なんでもそのころから帝国に雇われてるんだとき、くわしくはしらんが。

拝金主義者のブラックブライア家が、そんな彼らとの繋がりを欲したのはある種当然だったんだらうな。

何がしらの手段で彼らとのつながりを持ったブラックブライアは、奴らからまったく新しい酒の造り方を教わったのが今のスカイリムの好景気の始まりだった。

そう、あなたが飲んでいるそれ、ビールだよ。

昔のハチミツ酒が主流であったリフテンで、驚異的に腐敗を抑える事を可能とした酒「ビール」や殺人的な度数を誇る「ウイスキー」や「ブランドー」を売り出した事でB・O・Sとブラックブライアは多大な財を築いたんだ。

これらの新しい商品は、寒さの厳しいスカイリムにおいて爆発的にヒットした。

実際うまいし、日持ちするし、なにより値段もそう高くない。蜂蜜酒がまずいってわけじゃないが日持ちが悪いからな。商売するほうにしてみればこっちのほうが全然いい。

今やこの地方の酒場は無論、シロディールでさえ扱っていない店が無いって言われるほど有名な酒で、これらがB・O・Sの地位を不動のものにしたといってもいい。

同時期に不可解な事故などで他の酒造が蜂蜜種の販売に支障をきたしていた事も彼らの商売に良い影響を与えているな。盗賊ギルドと手を組んでいるっていう噂もあったが、B・O・S主導の盗賊ギルドの大規模討伐でそれらが根も葉もない話だということは皆が知るところだ。

まあ、事故がB・O・S自身の手で行われた工作だとすれば……やめておこう、おれも命が惜しい。

まあ無論、これだけなら現地の人間にとってさほど歓迎されるような話じゃない。

連中は何を思ったかそれらによって手に入れた財産を惜しみなく農業に投資し始めたんだ。

彼ら自身がドゥーマーの遺跡から手に入れた道具や素材を使って生み出された機械「トラクター」や「コンバイン」は、当時のスカイリムは無論、タムリエル大陸のどこにも見られないような広大な土地の開拓を可能にし、同時にそれら農地を運用するために大規模な雇用を生み出した。

大開拓時代って奴だ。農業革命とか言う奴もいるな。

戦うことに嫌気のさした傭兵崩れや、災害により故国を失い、定住する地を求めて彷徨うダークエルフなんかをB・O・Sは嫌な顔一つせずにがん雇った。

給金だつてきちんと払ってるって話だ。噂じゃ下手に砦の中で働くよりも農場で働くほうがずっと稼げるって聞くぞ。まあ、さすがにそれは眉唾物の話だと俺は思うがな。

少なくとも昔ほど食うに困った連中は見かけなくなったのは確か

だ。ノルドの差別に嫌気のさした連中がB・O・Sの農場に移り住んで、今じゃ農場にいけば色々な種族の連中が楽しくやっているって話だよ。

B・O・Sはコメとかいうのを熱心に探しているって話だが、発見したって話は未だにないな。なんでもそれを見つければもっと収穫を増やせて、まったく違う酒を造れるとか何とか。

いったいそんな知識をどこで学んだんだろうな、不思議な連中だよ。

今にして思えば、そうやって手広く開拓したのがノルドの連中の反感を買ったんだろうな。儲けるB・O・Sの影で商売を妨害された酒造や種族差別の強い連中が恨み妬みを溜め込んで、いまのストームクロークを結成させるまでになった。

だが、それも長くはつづかんだろうさ。

B・O・Sは別に何一つ悪いことはしていないんだ。開拓している土地だって、皆の酋長から購入したもので、奴らの言うようなノルドのものなんかじゃない。

大体、あいつらが誇れるのは過去の人間の偉業だけだ。開拓の邪魔だからって理由で、子供のお使い感覚で巨人討伐をするような奴が群れを成すB・O・Sの連中にストームクロークが敵うものかよ。

同胞団くらいか、有名なのは。だがB・O・Sほどじゃない。

帝国の兵士だって連中の前じゃ大人しいもんだ。昔は横暴な奴も多かったが、B・O・Sは相手が帝国兵だろうが貴族だろうが、それこそサルモールだろうが容赦しないからな。

御伽噺の中の存在じゃない、あいつらは現代の英雄なのさ。

最近はブリークフォール墓地に調査隊を派遣してたよ。山賊が根城にしているとは言ったんだが、まあ、今頃新しい埋葬品を持ち帰るかどうかが吟味しているんじゃないか？

どうしてか、B・O・Sはヘルゲンには常駐しないんだよな。何やらストームクローク討伐の手伝いだとかでこの間珍しく部隊を派遣していたが、B・O・Sが動いた以上この馬鹿騒ぎも終わりだろう。

B・O・Sに入りたい？

ああ、あんた外から来たんだったな。残念だが、B・O・Sは同じ故郷の連中しか入れないんだとよ。うまく話をあわせて入隊しようとした奴も、確かめるための試験で確実に弾かれるとか。

試験の内容は「手を使わずにテーブルの上のリングを取れ」とか言うものだよ。まあ、俺も見たことがあるが、魔法のようにリングが消えるんだ。

魔法で浮かせるんじゃない、文字通り消えるのだ。

で、消えた後は「取ったリングを出せ」って言われる。メニューでどうたらこうたらいつていたが、俺には宙からリングが現われたようにしか見えなかったな。

訳がわからないって顔だな。安心しろ、実際に見た俺にも最初は訳がわからなかったよ。なんでもB・O・Sの人間なら誰でも使える特技らしいぞ。

実際に見たかったら売り買いするB・O・Sの連中を見てるといい。買ったものが次々に消えていくのは中々面白いぞ。

そうか、もういくのか。

何か必要になったら今度は是非うちに買いに来てくれ。旅人の話

と珍しい商品はいつだって大歓迎だ。

もしB・O・Sに入れたら、隊長さんによろしくいってくれ。じゃあな。